単于瓦の窯址

臼杵勲（札幌学院大学）

はじめに

ハルヒラー川１遺跡（KHG1）は、オルホン平原北部のモンゴル国アルハンガイ県ウリジート郡に所在し、オルホン川本流に西の丘陵部から注ぐ支流ハルヒラー川の谷内の河岸段丘の緩斜面上に立地する。本遺跡は、T.イデルハンガイにより 2021 年に発見された。ハルヒラー川の浸食により、段丘崖の 2 ヶ所に炭化物・焼土の堆積が露出し、窯の存在が確認された。また段丘上には、川に沿って約 100m×20m の範囲に匈奴時代の特徴を持つ瓦片が散布しており、匈奴時代の瓦窯址群であると推定された。2022 年 5 月に臼杵・イシツェレン・木山も現地を視察したが、河川による遺跡の崩落が進行しており、迅速な発掘調査が必要であると認識した。そこで、発見者のイデルハンガイも参加して、2023 年度に共同調査を行うこととした。調査は、2023 年 8 月 16 日から 27 日まで実施した。

1. 1 号窯跡・2 号窯跡の発掘調査

1 号窯址　1 号窯址は遺跡の上流側に位置する。焚口部分・燃焼室はすでに浸食により大部分が失われていたが、残存部が段丘崖に露出していた。流路変動により窯の焼成部も削平され、底部付近が残存したにとどまる。周辺に遺物散布が希薄であり遺跡の北西端に位置していると考えられる。

焼成室は、地山を掘り込んで構築され、径 1.7m×1.8m の偏円形を呈する。上部には壁・天井が積まれていたと思われるが、詳細は不明である。底部は傾斜している。燃焼部は端部を確認したにとどまるが、崖断面では木炭・灰がレンズ状に堆積しており、舌状の形状を持っていたと考えられる。遺物はすでに流出し、出土しなかった。通常の瓦・土器窯とは形態が異なり、別の用途が考えられ、木炭窯などの可能性があろう。燃焼室部分で採取した木炭片を測定試料として採取した。

2 号窯址　1 号窯址より約 50m 下流側の段丘崖断面の炭化物・焼土の堆積と、上部の平坦面にひろがる焼土と石列により確認された。ここでも、河川の浸食と流路変動により作業用の前庭部・焚口・奥壁部分が流出していたが、その他は良好に保存されていた。

窯は、地山を掘り込み構築された半地下式構造をしており、現存部は、燃焼室と焼成室に分かれる。現存長約 2.6m。燃焼室の壁には粘土、焼成室の壁には板石と粘土を貼り付け補強していた。焼成室は平面形台形で長約 1.6m、幅約 1.6m。中央に幅 0.4m の通炎溝が走り、奥壁中央に一ヶ所設けられた煙道とつながる。奥壁は旧河道の浸食により破壊されていたが、煙道の白色土を置いた底部付近と堆積物が残存し、奥壁の位置を確認した。燃焼室は幅約 1.2m で本来は舌状の平面形を持ち焚口につながっていたと思われる。焼成室へは、約 0.4m の比高差で緩やかに立ち上がる。壁上部と天井は失われているが、粘土・日干し煉瓦を積んで構築したものと思われ、内部の埋土中に、指の圧痕がある焼土塊が多数包含されていた。

横断面では、南東側の板石を据え付けた壁の外側に、さらに 1 枚の被熱層が存在し、床面の被熱層も石貼りの壁の外側に延びることが確認できた。最初の操業後に石貼りで壁を再構築して最利用

したと考えられ、2 時期の操業が想定できる。

埋土より出土した瓦・土器片は匈奴時代の特徴を有しており、匈奴の窯址で間違いない。特に、埋土中に「天子単于銘」瓦当の破片や文様が描かれた平瓦片が複数出土し、これらを焼成していたことが確認された。同じ銘文瓦を出土したハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡との関係が明らかとなり、この窯址群から遺跡へ瓦が搬入されたことが明らかとなった。

2. 試掘・磁気探査

窯址の発掘調査に加え、遺跡内の窯業関連遺構の存否と分布状況を探るため、試掘調査と磁気探査を実施した。試掘は、表土上での遺物散布が顕著な地点を選び、6 か所で試掘を行った。遺物の散布、土坑、流路状の堆積、石敷き遺構などを確認したが、窯址は確認できなかった。石敷き遺構は、遺跡の中央部に位置するが、周囲の地表にも石材が集中している地点があり、他にも同様の遺構が存在したらしい。敷石下には焼土層が認められ、火を焚いたのちに板石を敷いたらしい。時期・性格は不明である。

磁気探査に使用した機材は Bartington 社製フラックスゲート型磁力計 Glad601（single sensor）である。川岸からの緩斜面から段丘平坦部にかかる部分に、隣接させながら 20m×20m 調査区 3 ヶ所・10m×10 調査区 2 ヶ所を設定し、1m 間隔で南北に移動して測定した。

通常、窯址のように強い被熱を受けた場合、正負の磁場が双曲線状に並列する磁気異常が現れ、窯址の存否の目安となる。今回の調査区内ではこのような明確な反応が見られず、直線状に 20m 以上続く反応が見られたが、形状・規模からみて窯址とは考えにくい。遺跡の堆積の状況から河川の旧流路などが想定されようか。また窯址と考えられる明瞭な反応は確認できなかったが、西南部で輪状に負の反応が存在する地点があり、何らかの遺構が存在する可能性もある。

3. まとめ

以上のように、河岸で 2 基の窯址を確認し、発掘を実施した。1 号窯址は、土器・瓦を焼いたものではなく、時代・用途の検討が必要であるが、木炭窯であるとすると、燃料生産と操業実態の解明に重要な資料となる。また、2 号窯址の発掘により、瓦の生産地と供給地を明確に確認できた。銘文瓦や新たに発見された文様塼の存在は、ケルレン川流域など他地域の城址との差異を示し、比較研究を通じた匈奴国家の経営の解明にも重要な資料となる。そして、匈奴時代の窯業関連遺跡の調査例は非常に少なく、その操業実態の解明にとっても不可欠の資料である〔臼杵 2023〕。

今後は、年代測定による時期の確定、工房・他の窯址などの確認、瓦・土器・塼の技法・文様等の考古学的検討を進め、供給地であるハルガニン・ドゥルヴルジン遺跡との関係もより詳細に検討する必要がある。

探査・試掘の結果では、河川の流路変動により遺跡がかなり破壊されていることが判明し、確実な関連遺構は確認できなかった。2024 年度においては、地下レーダー探査も用いて、窯址・工房等の確認に取り組む予定である。

参考文献

イデルハンガイ.T　2023「ハルガニン・ドゥルヴルジンの匈奴の単于の夏の宮殿発掘調査結果から」『遊牧帝国の文明』、pp.45-68、三元社

臼杵　勲　2023「匈奴の窯業生産」『遊牧帝国の文明』、pp.155-169、三元社

白石典之 2002『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社

遺跡全景（東から）

遺跡周辺の地形

1 号窯址（北東から）

2 号窯址全景（南西から）

2 号窯址全景（北東から）

銘文瓦当片

文様塼片